

# 池上年と礎石の実測

明治時代になっても、大宰府政庁の礎石研究は、依然として福岡藩が作成した絵図を基にして行われていました。そこに近代の測量技術を持ち込み、以後の考古学的研究の嚆矢となったのが、当時中学修猷館（現在の修猷館高校の前身）の教師だった池上年でした。池上は石造美術に関心をもっていましたので、

大正6年（1917年）に刊行されました『考古学雑誌』に「福岡附近に於ける板碑と五輪塔との関係」という論文を発表しています。

その池上が、現在でも測量の基本となつています。平板測量の技術を駆使して大宰府政庁の礎石を実測し、その成果を翌大正7年（1918年）に刊行された『考古学雑誌』の8巻7号と11号に「都府楼址の研究」と題する論文として発表しています。池上は『日本百科大辞典』の「大宰府址」の項に「今は原形を知るを得ず」とあることと現状の乖離に疑問をもち、「現状の詳細と正確なる実測図とを提供すること」を目的として、この論文を書いています。そこで県立工業学校（現在の福岡工業高校）と修猷館の生徒にトランシットやポールなどを持たせ、平板実測を実施してい

## 大宰府人物志

資料室だより ⑦

ます。その調査は個々の礎石の実測から建物の礎石配置までに及び、現状と古図との比較研究を論ずる詳細なものでした。この論文は上・中に分けて掲載されていますが、下は未完のままに終わっています。下で大宰府政庁についての総括的な論を展開する予定であったと思われるので、中断は残念なことでした。

論文の中断は池上が福岡を去ったことと関連すると思われる。池上は大宰府礎石論の次に、「三河国幡豆郡西尾町貝塚に就いて」を『考古学雑誌』に大正9年（1920年）に書いていますから、岡崎市に転居したことが、「下」未完の事情だったと推察しています。その後、昭和元年（1926年）に岡崎石造美術研究所を創設して、石造美術の研究者として活躍するとともに、赤坂離宮の御苑形石灯籠をはじめ優れた石造品を制作しています。

大宰府研究に近代的方法を最初に導入しました池上年は、福岡では忘れられましたが、優れた著名な石造美術研究家としての生涯を、昭和53年（1978年）に終えています。

公文書館構想調査研究委員会

副会長 高倉 洋彰